市制施行60周年記念
平成6年度市川市文化祭

ファミリー交響楽コンサート

〈フランシスコ・アロンソ氏を迎えて〉

1994年
平成6年

10月23日(日)　2時開演
市川市文化会館大ホール

243th

主催：市川市教育委員会　市川交響楽団協会

開催のごあいさつ

市川交響楽団協会
理事長　村上　正治

市川市制60周年を祝した第243回の市響（いちきょう）コンサートにようこそ御出かけくださいました。誠に感謝申し上げます。

３週間前の10月２日に開催した「合唱の集い」演奏会にひきつづき本日は、小生母校の国立音楽大学関係で、想像もしておりませんでしたスペインの世界的ピアニスト「ホセ・フランシスコ・アロンソ」先生をお迎えして、ベートーヴェンの「皇帝」を共演できます事は、アマチュアオーケストラとしては恵まれた珍事で市制60周年の祝賀行事に相応しい会になりました。

ファミリー交響楽コンサートですので、会場には青少年の方々も多いと思いますが、どうか最後までご静聴のうえ楽しい有意義な会にしたいと存じます。

アンコールではスペインの名曲にも触れられると存じます。また後半のブラームスの名曲「第１交響曲」も鑑賞していただきたく、団員一同は練習に励みました。どうぞ、日曜日の午後ゆったりとした気持ちで、交響楽の響きにつつまれた主旋律の変化を期待しながら、お聴きください。きっと感動される事と存じます。今後も市響の文化活動にますますご声援をお送りください。

終わりに、ご協力くださいました市川市教育委員会を初め関係者の皆様に、厚く御礼を申し上げ開催のごあいさつといたします。

プログラム

ピアノ協奏曲　第５番「皇帝」変ホ長調作品73 ……L. V. ベートーベン

Piano Concert No5「Emperor」E-flat major op.73　　Ludwig Van Boethoven

(1770－1827)

第１楽章　Allegro

第２楽章　Adagio un poco mosso

第３楽章　Rondo:Allegro

演奏時間（約40分）

―――――― 休　憩 ――――――

交響曲第１番　ハ短調　作品68 ……J. ブラームス

Symphony No. 1 C-minor op.68　　Johannes Brahms

(1833－1897)

第１楽章　Un poco sostenuto：Allegro

第２楽章　Andante sostenuto

第３楽章　Un poco allegrette e grazioso

第４楽章　Adagio:Più andante

Allegro non troppo.ma con brio

Più allegro

演奏時間（約45分）

指　揮：吉田裕史

ピ ア ノ：ホセ・フランシスコ・アロンソ

管 弦 楽：市川交響楽団

出演者プロフィール

ピアノ：
ホセ・フランシスコ・アロンソ

スペイン　サンタンデルに生まれる。８歳の時、初めてピアノレッスンを受け、15歳には王立マドリード音楽院を卒業、パリ・ローマ、そしてミュンヘンに留学し、カルロ・ゼッキ、ウィルヘルム・ケンプ、レンソ・シルヴェストリに師事。特にケンプからは、「類い希な才能の持ち主」と絶賛された。彼は、ヴェニスのオットリーノ・レスピーキ、ボジターのウィルヘルム・ケンプ、リスボンのヴィアンナ・デ・モッターのコンクールでそれぞれ優勝している。スペインを初めヨーロッパ各都市でのリサイタル、更には旧ソヴィエト連邦、アメリカ合衆国にても広範囲の演奏旅行を行うとともに、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、スイス・ロマンド等のオーケストラとの共演も多く、常に高い評価を受けている。

「演奏の詩人」（ウィーン・クリーア新聞）とか「超特急のピアニスト」（フランクフルト・アルゲマイネ新聞）と称され、また「スペイン音楽の偉大な演奏家」（リオデジャネイロ・ブラジル新聞）の現代における最も偉大なスペイン人のピアニストとしてその経歴を評価している。ドイツの伝統的なピアニスト、ウィルヘルム・ケンプの弟子としてアロンソは、ベートーヴェンのピアノのためのソナタ32曲のすべてを演奏し成功を収め（1984年のウィーン音楽祭）、ケンプの伝統を受け継ぎ、毎年ベートーヴェンの作品の演奏についての講習会をヨーロッパの主要都市で行っている。

1987年には、バルセロナとマドリッドにおいてモーツァルトのピアノソナタ全曲を演奏、またスペインの重要な作品（アルベニス、グラナドス、ファリャ）のレコードは、世界的な注目を集めている。また、モスクワのチャイコフスキー国際コンクールを初め、ミュンヘン、サンタンデル、リスボン、東京、アテネの国際コンクール審査員を努めている。

指揮　吉田（よしだ）　裕史（ひろふみ）

1968年生れ。千葉県国府台高校卒業。現在、東京音楽大学指揮科に在籍し、指揮を汐澤安彦、ピアノを岡藤由希子、コントラバスを小野崎充、音楽理論を有馬礼子、糀場富美子各氏に師事。

市川交響楽団、水戸ジュニアオーケストラ、グローバルフィル等の各オーケストラの指揮者、トレーナーとして活動する他、長岡市民合唱団をはじめとする各合唱団の指揮者を務める。オペラの分野においては「カルメン」「ルクレーシアの凌辱」等の制作に携わり、昨年「フィガロの結婚」を指揮、好評を博した。現在、乗泉寺吹奏楽団常任指揮者、船橋市交響吹奏楽団指揮者。'94年ウィーン・マイスターコース指揮セミナー修了。

練習指揮　斎藤（さいとう）　育雄（いくお）

早稲田大学ロシア文学科卒業。現在、東京音楽大学指揮専修コース３年に在学中。指揮を紙谷一衛、山下一史、ピアノを南正子、音楽理論を糀場富美子、上江洲怜以子、スコアリーディングを上江洲怜以子の各氏に師事。

吹奏楽、オーケストラの指揮および歌曲の伴奏で活躍中。

市川交響楽団

本年、創立44年を迎える、アマチュアとしては全国有数の伝統あるオーケストラ。現在メンバーは120余名、年齢構成は20代から70代の大変広い層に渡り、職業も会社員、教師、主婦などそれぞれさまざまですが、全国各地で開催される文化行事や、オーケストラフェスティバル等、各地で演奏を披露しています。著名な音楽家との共演も多数経験していますが、地元市川ゆかりの音楽家との共演を通じて、その育成にも務めています。

また、市川混声合唱団、市川交響吹奏楽団、行徳混声合唱団、市響ジュニアオーケストラとともに市川交響楽団協会を構成し、クラシック音楽をより多くの市民に楽しんでもらえるよう活動しています。

ファミリー交響楽コンサートでは、子供から大人迄、より多くの方々にクラシックの名曲に親しんでいただける演奏会となるよう企画しています。

曲目紹介

ベートーベンピアノ協奏曲第５番「皇帝」 作品73

モーツァルトによって土台を築かれたピアノ協奏曲というジャンルは、ベートーヴェンによって一応の完成をみたと言って良いでしょう。

この第５番は、彼のピアノ協奏曲最後の作品です。1809年に作曲されて、ルドルフ大公に捧げられました。

いきなりピアノのカデンツァで始まるという、当時としては非常に斬新なもので、また、協奏曲という単にソリストの名人芸を見せるだけであった音楽に、交響的な要素を導入してオーケストラ・パートの充実が図られいます。

「皇帝」という名前は誰がつけたのかはっきりしていませんが、規模雄大な内容からの連想であるとも、あまたある協奏曲の中で規模、内容共に「皇帝」の地位にふさわしいからだとも言われています。ロマン・ロランは、この曲について「軍隊行進の響きが聞こえ、音楽の技巧が英雄的である」と語ったということです。

第１楽章　華麗なピアノのカデンツァで始まります。変奏も交えた多彩な展開を経て、堂々と終結します。

第２楽章　深い情緒に満たされた静かな楽章。弱音器をつけた弦楽器による、静かな第１主題で始まります。ピアノが弱音で弾き始めるのは、第３楽章への予告。休みなく、第３楽章へ。

第３楽章　第２楽章から続くホルンの持続音の上に、ピアノが颯爽と登場。８分の６拍子によるロンド主題です。変奏風の展開部があるのが特徴です。　（オーボエ　大坪昌彦）

ブラームス　交響曲第１番　ハ短調　作品68

1876年秋に完成したこの交響曲はブラームス43歳の時の作品であり、構想から完成まで、20年近くを要したと言われています。彼は、ベートーベンの音楽を自分の音楽の原点とし、この曲は初演当時ベートーベンの九つの交響曲につづく傑作という意味で、第10交響曲と呼ばれました。

ブラームスはベートーベンを模範としながらも、独自の作風で曲を書き上げていきました。例えば、メロディーと伴奏のリズムを微妙にずらせて、音楽に拡がりを持たせ、きっちりとまとまった構成でありながら、緊張感、抒情性、不安感、力強さなどが豊かに表現されています。

いきなりティンパニーとコントラバスのリズムに、緊張感あふれる重々しいメロディーで始まる第１楽章。一転して、心の春を思わせるような抒情的な第２楽章。明るいような侘しいような、何か不安を隠せないような間奏曲風の第３楽章。心の不安に打ち勝つような、力強さを感じさせる第４楽章から成るこの曲は、結実することのないシューマンの妻クララへの想いや、内気で人付き合いが必ずしも上手でなかったブラームスの様々な葛藤が詰め込まれたものと解されています。

初めてこの曲を弾いたときは楽譜についていくのが精一杯でしたが、それから十数年の間にコンサートやＣＤで聴いたり、演奏を重ねていくにつれて、この曲の奥の深さと表現の難しさを感じます。　（コントラバス　山木和広）

アップかダウンか、それが問題だ

―――― 弦楽器奏者とボウイング ――――

今回は〝弦楽器奏者とボウイング〟と題してひごろ弦楽器奏者が、頭を悩ませている〝ボウイング〟について文章を書きたいと思います。

弦楽器とはバイオリンであろうが、コントラバスであろうが、楽器本体に付いている弦の上に、右手に持った弓を上下させながら、弓についている毛（馬のしっぽを白く漂白したもの）と弦で摩擦を起こして音を出す楽器群といえます。

この上下させながらというのがみそで、弓を上から下へおろすのが〝ダウン＝下げ弓〟、下から上へあげるのが〝アップ＝上げ弓〟と呼んでいます。ある音の音程は指板（左手でおさえる楽器部位）のどこを押さえるかによって基本的には決まります。ただしこれではピアノ等の鍵盤楽器とあまり変わらなくなっていまいます。

音色（音の出だしをはっきり出す。クレッシェンドで弾く等）を決めるのは右手の技術であります。

ボウイングとはその右手の動きのことで、アップかダウンか、スラーか（ひと弓で複数の音符を弾くこと）返すかなどの動きを総称したものです。

弓の元で弾くと右手の力が直接、弦に伝わるので、大きなハッキリした音がでやすい。

そのため通常、音の出だしをはっきり出したい時は、弓の元を弦につけて〝ダウン＝下げ弓〟で弾くとそのような音が出やすいのです。

またクレッシェンドで弾きたい時は、初めは弓の先を弦につけて徐々に大きな音が出やすい弓の元へ動かす〝アップ＝上げ弓〟を使うことになります。

しかし、これは一般的にいえることで、曲それぞれによって事情が異なってきます。

なかにはクレッシェンドかデクレッシェンドか、次の音を弓の先で弾きたいかもとで弾きたいか、スラーで弾くか返して弾くか等の要素を全て満たすボウイングがなかなかみつからない場合があります。

また同じパート内では同じボウイングを使いますが、となりのパートと重なったメロディーの場合は同じボウイングの方が曲相が合わせられるなどのパート間の統一という要素もからまります。

演奏者の技量、指揮者の意向も勘案にいれるとどのボウイングも〝おびに短しタスキにながし〟になります。そこで本コラムの表題のようになるのです。

本日、当演奏会にお越しいただいた皆さんにおかれましては、ひごろの演奏会より若干目をさらのようにしていただいて弦楽器奏者の弓の動きに注目していただければ、いつもと違った演奏会になるのではないかと思います。

（ヴァイオリン　堤）

本日の出演者

第一ヴァイオリン
鈴木　薫
鈴木　淳子
竹内　甲
堂本　裕司
中渡　宏
永田　匡
二宮　伸雄
福原　祥子
松延　裕子
横田富美子
横田佐貴絵
渡辺千恵子
笠松　秀臣

第二ヴァイオリン
石井　久雄
石本　恵理
亀井　玲子
須永　恒雄
堤　哲児
根守　弘和
久田しげ子
深沢　武夫
三木美千子
村上　葉子
村田　康代

ビオラ
岩本　泰
斎藤十一郎
高橋　行継
竹内ひとみ
星　乗昭
村上　賢一
横田　行雄
若林　繁
渡部　玲子

チェロ
池田　寛之
倉沢　由和
瀬川　清
田頭　扶
南明由美子
樋口　進
福原　耕二
横田　朝之
渡辺　潔

コントラバス
池田　和正
内田　葉子
河内　恵二
菊地　克彦
鈴木　重則
村上　信乃
山木　和弘
李　隆子
宮本　彰

フルート
木村　純一
木村真諭紀
佐藤　洋行

オーボエ
荒井　淳
大坪　昌彦
二村　直子

クラリネット
一瀬　直美
多田　準也
時田　雄
半藤　嗣人
吉野　智久

ファゴット
金坂　哲
小島　厚
戸川　安道
吉儀富貴子

ホルン
越塚　康央
近藤　利昭
嶋村　恒夫
藤井　茂司
山本　恭子
山内　正晴

トランペット
安藤　宣明
一桝　泰一
新井本昌宏

トロンボーン
久保　昭
粂　秀樹
藪崎　裕至
椙谷　妙絵

打楽器
岩橋　正治
木村　範子
丹羽　祐子

平成6年度 市川交響楽団役員

団長	村上　正治	副団長	横田　行雄
幹事長	時田　雄	弦チーフ	松山　和子
総務	越塚　康央	管・打楽器チーフ	木村　純一
会計	石本　恵理	広報	堤　哲児
会計	木村真諭紀	企画	嶋村　恒夫
渉外	中村　公一	庶務	亀井　玲子
事務局	半藤　嗣人	管財	高橋　行継